

著名オーケストラの
音楽監督・首席指揮者リスト付
世界のオーケストラ135団体の
歴史・特色・レコード

世界のオーケストラ辞典

処理済

SPECIAL THANKS TO

サイトウ・キネン・フェスティバル松本
ユニバーサルミュージック

DVD制作 ユニバーサルミュージック

書籍制作 佐藤まり子 池田靖 西手成人
販売 荒井正雄
宣伝 後藤昌弘
編集 野村和寿

DVD BOOK

『第九』編集室編

歓喜！ベートーヴェン第九を楽しもう

●2004年12月20日 初版第1刷発行

発行者 中尾 等
発行所 株式会社 小学館
〒101-8001東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話 編集03・3230・9354
制作03・3230・5333
販売03・5281・3555
振替 00180-1-200
印刷所 図書印刷株式会社
製本所 牧製本印刷株式会社

図(日本複写権センター委託出版物)

本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03・3401・2382）にご連絡ください。造本には充分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら「制作局」あてにお送りください。送料小社負担にて取り替えます。

ISBN4-09-480221-5

©SHOGAKUKAN 2004 Printed in Japan



歡喜!
ベートーヴェン
第九を
第楽しもう

監修／青木やよひ
『第九』編集室 編

江苏工业学院图书馆
藏书章

shogakukan

DVD
BOOK

『第九』DVD

ベートーヴェン

交響曲第九番 ニ短調 作品125「合唱」より
第4楽章「歡喜の歌」

アンネ・シュヴァーネヴィルムス (ソプラノ)

バーバラ・ディヴァー (アルト)

ポール・グローヴズ (テノール)

フランツ・ハヴラタ (バス)

東京オペラシンガーズ

サイトウ・キネン・オーケストラ

指揮：小澤征爾



歓喜！ベートーヴェン第九を楽しもう
目次

巻頭エッセイ

『第九』は年に一度のお祭りの日。 お洒落して、ときめいて、さあ出かけましょう! — 6

篠田節子

対談◎日本人と『第九』

なぜ日本人は『第九』が好きなのか — 14

青木やよひ・北沢方邦

日本ではなぜ年末に『第九』なのか?

ベートーヴェンってどんな人?

『第九』になぜ合唱や歌のソロがあるのか?

『第九』は自分の成長と共に意味が深くなる

意外! 『第九』にはトルコやインドの影響があった?

『第九』の一番の出費はろうそく代?

『第九』は人生を振り返るチャンスである

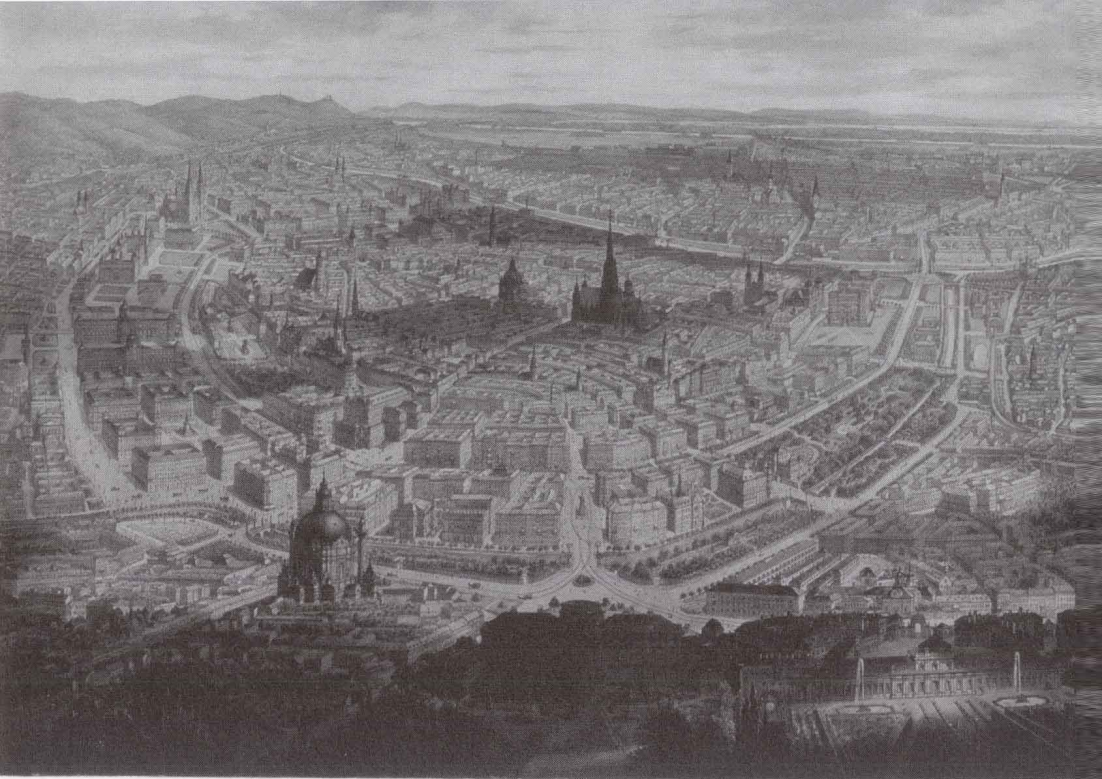
ベートーヴェンは1770年12月16日(推定)、
現在のドイツ、ボンで生まれた。



サイトウ・キネン・オーケストラを指揮する小澤征爾。

撮影/©ND CHOW 撮影協力/サイトウ・キネン・フェスティバル松本

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



19世紀のウィーン市街（銅版画） ウィーン市立歴史博物館蔵

『第九』を聴きに行く——26

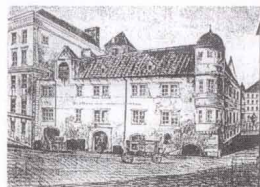
『第九』なぜなにBOOK——36

『第九』の原点「歓喜に寄す」——42

ベートーヴェンに会いに行く

ボン——48

ウィーン——54



ベートーヴェンの行きつけだった
ウィーンのレストラン「白島館」。

眺めのよい部屋を求め、ウィーンで
35年間に30回以上も引っ越した。





19世紀中頃のウィーン市内 ルドルフ・フォン・アルト作

ベートーヴェンのさまざまな貌 ^{かお} 青木やよひ—— 56

ベートーヴェンと女性 青木やよひ—— 62

ベートーヴェン人生劇場 —— 66

ベートーヴェンにご馳走になる —— 74



健康に気を配り、ミネラルウォーターを愛飲。

小澤征爾と
サイトウ・キネン・オーケストラ—— 82

征爾と『第九』 小澤幹雄—— 84

DVD映像の楽しみ方 —— 94

参考文献—— 95



大好きなコーヒーは、
豆60粒を数えて入れた。



巻頭エッセイ

サイトウ・キネン・オーケストラの2002年『第九』演奏会。

写真提供／©サイトウ・キネン・フェスティバル松本



『第九』は
年に一度のお祭りの日。
お洒落して、
ときめいて、
さあ出かけましょう！

篠田節子（作家）

『第九』は年に一度、 「歓喜の歌」を楽しむ行事です

年末になると、プロ、アマチュアを問わず『第九』が演奏されますが、「ベートーヴェン」とか「交響曲」とかいうクラシック音楽の枠を越えた、「歓喜の歌」を楽しむ行事にもなっているんじゃないでしょうか。こういうのって、音楽会のひとつのスタイルですね。

最近では、クラシックコンサートでもジーンズやセーターなどのカジュアルな服装で来る人も増えていますが、年に一度の『第九』のコンサートは、せっかくですからドレスアップして行くのもいいものです。結婚式以外は袖を通したことがない、普段はなかなか着られないドレスで出かけるもよし。男性は、いつもはしないようなちょっぴり派手なネクタイを締めてみるもよし。ぐっとコンサートへの期待が高まります。

コンサート後のディナーも 大切なお楽しみ

日本のコンサートは、たいてい開演が夜7時で、終わるのは9時半頃。早めに会場入りしてロビーに繰り出し、自慢のドレスを見せびらかしながら、ビールやワインのグラスをゆったりと傾けるのもこんなときの楽しみ。そして終演後は、お腹を空かせておいて、ぜひディナーへ。コンサートの余韻を楽しみながら、たまにはゆっくりと大人の時間を過ごす



『第九』コンサートは、
彼女をデートに誘いやすい？

のもいいものです。言うなれば、ドレスアップ～夜の外出～ディナーという、年末の祝祭的なイベントのど真ん中に位置しているのが『第九』。大人たちのとっておきの「年末のお祭り」なんです。忘年会シーズンのまっただ中ですが、年末には酔っぱらってカラオケに行くだけが能じゃないんです。

チケットを買った瞬間から コンサートは始まる！

コンサートに出かけるのは「晴れの日」。チケットを買ったその日からもう『第九』の楽しさは始まっています。誰と行くのか、何を着ていくのか、コンサートのあとどこで食事しようか……。いよいよ当日を迎えると、朝から一日中、何とも言えないわくわく感があります。

年末の『第九』は一種のお祭り。普通のクラシックコンサートよりは雰囲気もずっと大衆的です。忙しい時期に寒風について、「歓喜の歌」を聴きにみんながやってくる。そういう意味ではマニアックの対極にある、いわば「物見遊山もOKのコンサート」。年末のお祭りだからこそ、休憩時間にはお酒が似合うんです。ワインの酔いが心地よく、寝てしまったり、うっかりいびきをかいてしまっても『第九』なら大目に見てもらえそう。そして第1楽章から長い長い時間を耐えて、ようやく現れる「歓喜の歌」。誰でも知っているあの旋律にたどりつくのと、本当にうきうきして、「今年も一年間元気に過ごせた」という気分になりますよね。

小さな白黒テレビで見た『第九』に 感動した中学時代

我が家は生で音楽を聴くような環境ではなかったので、私の音楽体験はすべて学校の授業ですね。小学校のとき、レコード鑑賞でクラシックの小品集に触れたのが最初です。中学校でも同じです。高度成長期のピアノブームのまっただ中で、友達のピアノ発表会に行って、『エリーゼの

ために』やショパンのワルツを聴いたり、放課後に音楽室に集まって、ピアノが弾ける友達を囲んでワイワイ盛り上がったり……。でも私自身は、高校を卒業するまでは、楽器は何も習っていませんでした。

初めて『第九』を聴いたのは、中学2年生の頃でしょうか。家族が見ている紅白歌合戦の裏番組で放送していた『第九』を、映りの悪い小さな白黒テレビでひとりで見ました。当時はベートーヴェンの音楽も交響曲がどういうものかもわかっていませんでしたが、オーケストラの音の厚みが感動的だったことを覚えています。

生で『第九』を聴いたのは、その翌年だったと思います。チケットは買った覚えがないので、たぶんどこからかもらったんでしょう。『第九』



全身全霊で振る小澤征爾の指揮は聴衆を魅了する。

撮影／©ND CHOW 撮影協力／サイトウ・キネン・フェスティバル松本

なら子ども同士で行ってもよからう」という親の許可も出て、友達とで市民会館に聴きに行きました。そういう場所でクラシック音楽を聴くというのは独特の緊張感もあり、知っている「歓喜の歌」の旋律が出てくるまで、大人と違って寝るようなこともなく、神妙な顔して待ってましたね。高校時代の『第九』は、当然カレシと一緒にですよ。

今も昔も『第九』は青少年の デートの定番?!

実は『第九』のコンサートというのは、デートに誘いやすいんです(笑)。映画だと、相手にもろに「デート」という印象を与えますが、コンサート会場という場所の非日常感と、「ちょっと高尚なことしてる」気分が照れ臭さを救ってくれるしね。高級感とハレ感がほどよくミックスしていて、お互いに気持ちが高揚する。実際、コンサート会場に行くと、



第4楽章冒頭でチェロとコントラバスが奏でる「歓喜の歌」のメロディーに注目。

写真提供／c サイトウ・キネン・フェスティバル松本

かわいいカップルがいまでも来ています。「『第九』をついに最後まで通して聴いちゃったぜ！ しかもコンサートホールで！ そのうえ彼女(彼)と！」という達成感がまたいいんです。たいていは、第4楽章の「歓喜の歌」にたどり着くまで耐えに耐えて、第2、第3楽章の途中で絶対に退屈する。「早く終わんないかな……」という時間を乗り越えて、「ついに聴いた！」という気分は格別のはず。そんな経験を繰り返しながら、だんだん長い交響曲を頭からしっぽまで楽しんで聴けるようになる。聴き手としての耳が進化していくんでしょうかね。

なかなか「歓喜の歌」が出てこない。 眠気&退屈防止法は？

実際のところ、クラシックの世界に『第九』から足を踏み入れるのは多少ハードルが高いかも知れませんね。『第九』に限らず、交響曲は1曲の演奏時間が長く、印象的な旋律が出てくるまでにその前を延々と聴かなくてはなりませんから。その上で、楽しみにしていた知っている旋律が聴けるのはちょっとの間だけ。初心者には、きれいな旋律が繰り返してくるビバルディの『四季』などバロックの方が聴きやすいのではないかと思います。

途中で飽きてきたら、どんな音がどの楽器から出ているのか、舞台の上に注目してみてください。あまり眠くなりませんよ。それに『第九』の場合は、第4楽章の冒頭の大きな音で目が覚めるから、仮に寝てしまってもご心配なく。

弾くと聴くとは大違い。 『第九』のチェロは難しい！

私自身、ベートーヴェンの曲は若い頃は好きではなかったのですが、今改めて聴くと、端正で聴きやすく、響きのきれいな音楽だと思います。ベートーヴェンという作曲家は、音楽室の怖い顔の肖像画と苦難に満ち

た生涯、悲恋を描いた映画などの影響で、「妙に重くて暑苦しい、意志と努力の人」というイメージがあります。しかし音楽的には正統的で、古典らしい端正な骨組みと、叙情性と併せ持ったもの。もちろん『第九』もこうした流れの中にある作品なので、どの楽章にも、純然たる音楽としての美しさがあふれています。

ただし、演奏するとなると話は全く別。私は下手くそなチェロで、ベートーヴェンのソナタを弾いたことはありますが、あれは心臓に悪い。『第九』などとんでもない。第4楽章のチェロの動きを見ていたら、恐ろしくて弾く気にならない(笑)。もちろんカッコいいところは弾いてみたいけど、全曲を弾くことを考えると頭が痛くなります。「もう少し低弦(チェロとコントラバスの総称)のことを考えろ!」と言いたいですね。『第九』は一年を締めくくり、来年も頑張るぞ! と元気をもらうにふさわしい音楽として年末に演奏されてきたようですが、格別頑張らなくても、合唱も加わる華やかで視覚的な曲で、年末の気分を盛り上げてくれます。年末の『第九』の次は、ぜひニューイヤーコンサートで、ウイナ・ワルツも楽しんでみてください。(談)



篠田節子

東京都生まれ。八王子市役所在職中の90年『絹の変容』(集英社)で小説すばる新人賞を受賞しデビュー。97年『女たちのジハード』(集英社)で第117回直木賞受賞。『カノン』(文藝春秋)『ハルモニア』(マガジンハウス)など音楽を題材とした作品も数多い。趣味でチェロを弾く。

写真提供/篠田節子

対談◎日本人と『第九』

なぜ日本人は『第九』が好きなのか

青木やよひ（ベートーヴェン研究家）

北沢方邦（音楽社会学者）

「ベートーヴェンの不滅の恋人」を永年にわたり追求し続ける評論家の青木やよひさんと、音楽社会学者の北沢方邦さんに、「日本人と第九交響曲」の関係について語ってもらおう。

北沢さんは、桐朋学園大学、信州大学で教鞭を永年とられ、本「DVD BOOK」の映像でサイトウ・キネン・オーケストラを指揮する小澤征爾氏も、北沢さんの音楽史の講義を聞いた教え子のひとりである。



サイトウ・キネン・オーケストラの「第九」は、ベートーヴェン交響曲全曲演奏の最後を飾り、2002年9月7日長野・松本文化会館で演奏された。写真提供／©サイトウ・キネン・フェスティバル松本

編集室 『第九』という名前を聞くと、年末に演奏されるあの「歓喜の歌」で、ベートーヴェンが作曲した最後の交響曲だということを、日本人のほとんどが知っています。とても不思議なのですが。

北沢 日本でヨーロッパ文化に広く門戸が開かれたのは明治以後ですが、当初からベートーヴェンは西洋音楽の代表者として紹介され、いわゆる「楽聖」として学校教育でも取り上げられてきましたからね。しかしそれだけではなく、ベートーヴェンが日本人の心性にアピールするものを持っていたということが大きいでしょうね。

青木 宮沢賢治なんかも、まだ日本人がレコードなど簡単に手に入らない時分からベートーヴェンに夢中になっていたようですね。そういえば「雨ニモ負ケズ」の詩に見られる賢治の隣人愛には、ベートーヴェンの影響もあったのではないかと思えてきます。じっさい賢治は、チャリティー・コンサートなどを率先してやるような人でしたから。

北沢 逆に見れば、ベートーヴェンのそういった要素が日本人を惹きつけたのかも知れないんですね。

青木 音楽作品としても美的に完成され、その上、人間の生き方のモデルにもなりうる芸術家ということでしょうか。

北沢 ただ『第九』は演奏も難しく、合唱やソリストも必要な規模が大きい曲だから、日本では滅多に演奏されませんでした。『第九』が盛んになって年末に定着したのは、1960年代に入ってからだと思います。

青木 敗戦の混乱から立ち直って社会が落ち着きを取り戻し、人々が芸術に目を向けて自分の内面を豊かにしようという気運が起こってきたのがきっかけかも知れませんね。しかしそのとき求められたのが、他の作品ではなくベートーヴェンの『第九』だったということには、大きな意味があると思います。

日本ではなぜ年末に『第九』なのか？

編集室 それにしてもなぜ日本では年末に『第九』なのでしょう。